ヨースタイン・ゴルデル著 池田香代子訳『ソフィーの世界』

袴谷憲昭

Wer nicht von dreitausend Jahren
Sich weiß Rechenschaft zu geben,
Bleib im Dunkeln unerfahren,
Mag von Tag zu Tage leben.
Johann Wolfgang Goethe

過去三千年の歴史について
正しい批判をなし得ない人は
無知なるままに闇にいるがいい
その日ぐらしですごすにしても
小牧健夫訳

一

ヨースタイン・ゴルデル（Jostein Gaarder）の著書『ソフィーの世界――哲学史物語（*Sofies Verden : Roman om filosofiens historie*）』が池田香代子氏の翻訳によって昨年六月に出版された。因みに、翻訳本の副題は「哲学者からの不思議な手紙」と訳し換えられている。私は本書を刊行時から知っているわけではないが、出版されるや俄然世の注目を浴びたらしく、哲学書関係のブームの中で、とりわけベストセラーを続ける書物として嫌でも私の目や耳に飛び込んでくるようになったのである。私が実際本書を手にしたのは年が明けてからではなかったかと思うが、私の所持している本書の奥付には、昨年の十二月二十五日の日付が入り、その段階で第五〇刷となっている。この手の本が一刷でどのくらい印刷するのかも私は知らないが、一刷一万とすれば、半年で五〇万冊近くが売れてしまったことになる。

求めた本の方は、正月休みでゴロゴロしている時にすぐ読んでしまったが、読んでみて、確かに上手くは書けているものの、こんな他愛もない本が大人たちにまで大真面目に読まれているとなると話は変わってこざるをえないのである。本書の原著者紹介によれば、ゴルデルは一九五二年にノルウェイのオスロに生まれ、高校で哲学を教えるかたわら、青少年向けの作品を書き続け、第五作目の本書は、一九九一年に出版されて以来、世界各国で驚異的なベストセラーになったとのことである。訳者の池田香代子氏は一九四八年生ま

れのドイツ文学者とあるが、「訳者あとがき」によれば、ノルウェイから世界のベストセラー作家が出たのは、一九二〇年度のノーベル賞作家クヌート・ハムスン以来だという。ただし、本書はノルウェイ語原書からの直訳ではなく、それを参照にはしたが、主としてドイツ語版を底本とし、英米の二種の英語版も参考にしながら翻訳したとのことである。しかも、本書の哲学書的な性格に鑑みて、一九四七年生まれの哲学専攻の中央大学文学部教授の須田朗氏に監修を仰いで用語や表現を整えたという。しかし、その須田氏が、巻末の「解説」において、いかに世界のベストセラーに便乗した売らんかな主義とはいえ、「〔本書の〕語り口はやさしいけれど、西洋哲学史の主要な哲学者は、古代ギリシア哲学から現代哲学まで、ほぼ〔本書には〕網羅されています。一人ひとりの哲学者についても、かなり突っ込んだ紹介がされています。だから、十四歳の女の子に向けられたこの哲学講座は、そのまま大学の一般教養の教科書に使えるくらいです。」（六五八頁）というコメントを与えているのを知って、私も黙ってはいられなくなってきたのである。また、須田氏によれば、ゴルデル自身も、「あるインタヴューのなかで「どんな読者を念頭において書いたか」ときかれたとき、「十四歳以上のおとな」と答えている」のだという。

今や大学の一般教養課程は、一九九一年に導入された大学設置基準の改訂により瀕死の状態に陥っているように私には感じられる。しかし、教育に熱心で、常に学生の耳に心地好い話をしようと心がけて学生の興味を引き出そうとしている教師は、以前にも増して元気で、少しも絶望などしていそうもないように見える。恐らく、そんな教育熱心な教師なら『ソフィーの世界』で哲学の啓蒙をと、楽天的なことを思いつくのかもしれないが、本書の一体どこが哲学的であるというのであろうか。本書はやはり十四歳の子供が読むような本でしかないのである。

ところで、私が以前にたまたま存じ上げていた須田朗氏は、本書の監修者としてではなく、『哲学の探究』（中央大学出版部、一九九三年）の木田元氏と組んだ監修者としてであった。また、その本の執筆分担箇所を見れば、須田氏は、古代のプラトンから近代のデカルトへ及ぶ、むしろ西洋哲学の「正統」を探究し、特に、デカルトに造詣の深い学者のように思われるが、そのデカルトは、「私どもは人間になる前まではすべてみな子供であった（nous avons tous été enfants avant que d'être hommes）」（*Discours de la méthode*, Classiques Larousse éd., p. 42：落合太郎訳『方法序説』、岩波文庫、二三頁）と言ったのである。勿論、子供は理性（raison）と言葉（porole）を持った人間とならなければならないが、本書の主人公ソフィーはどんな角度から見ても、やがて十五歳の誕生日を迎えようとしている女の子でしかない。しかし、その女の子に語って聞かせることになる「哲学史物語」を、十八歳以上の大学生の教科書に採用したとデカルトが知ったら、彼は一体なんと思うであろうか。きっと、大学は、彼が十八歳まで学んだラフレーシュの学校以前の学問に退化してしまったところと思うに違いない。だが、どんなに足掻いてみても、大学は今やそんなところでしかないのかもしれない。

本稿は書評であるから、大学の話はひとまず置くとしても、そもそも、本書の主人公であるソフィーという名前自体が、批判性のない非哲学的な本書の性格を暗示しているのである。ソフィーが「智

慧」を示唆していることくらいは、本書の書名を見ただけでだれしも気がつくことであろうが、著者が、ソフィー・アムンセンの相手役であるアルベルト・クノックスをして語らしめている言葉を次にそのまま引いておく。

古代キリスト教やユダヤ教には、神は一〇〇パーセント男性〔だけ〕ではない（Gott nicht nur Mann sei）、という考え方がある。神には女性的な面（eine weibliche Seite）、母性（Mutternatur）がある、とする考え方だ。だって女性も神の似姿なんだから。神の女性的な面をギリシア語では『ソフィア（*Sophia*）』っていうんだ。ソフィアあるいは『ソフィー（Sofie）』は『智恵（Weisheit）』という意味だ〔。〕（二三九―二四〇頁）

これがソフィー命名の由来である。しかも、この前後を含めて読めば、著者が女性解放のフェミニスト運動にも気を遣っていることが分かるであろうが、著者の女性問題に対する気遣いは、プラトンとアリストテレスの比較においても現われている。つまり、本書は極めてトピカルなものなのだが、女性差別のなかったプラトン（一二四頁）と女性差別のあったアリストテレス（一五四―一五五頁）とを比較した後では次のように述べているのである。

それにしても、アリストテレスのトンチンカンな女性観には困ったものだ。なぜなら、そう、プラトンではなくて彼の考えのほうが中世をつうじてまかりとおってしまったのだから。教会もこの女性観をひきついだ。聖書のどこにもそんな裏付けはないのに。イエスは女性の敵なんかではなかった！（一五五頁）

しかし、「哲学史物語」を自称するくらいなら、この両者の差異がなにに基づいているかをもっと克明に分析的に述べるべきではないだろうか。勿論、一般的な哲学史のごとく、「思惟によって知られるもの（noēton）」としての「普遍」のイデア（idea）を追求したプラトン（一一一―一二四頁）と、「感覚によって見られるもの（horaton）」としての「個物」の形相（eidos）と質料（hylē）を観察したアリストテレス（一四〇―一五四頁）との違いについては、本書でもかなり詳しく論じられているが、両者の女性観の違いも実はここに起因しているのである。この点をしっかり説明したなら、十四歳の女の子にも、プラトニック＝ラブや本当の哲学が一体どういうものであるかが少しはよく分かったのではないだろうか。だが、比較は極めて一般的で通俗的でしかないから、うっかり比較は次のような例にまで脱線するのである。人間の魂の三区分、即ち、理性（Vernunft）と意志（Wille）と欲望（Begehren）に従ったプラトンの国家の三階層に言及した直後に、アルベルトは著者ゴルデルに代わって言う。

プラトンの理想国家は、人それぞれが全体の利益のために（zum Besten des Ganzen）特別の役割（spezielle Funktion）をになっていた、昔のインドのカースト制度（das alte indische Kastewesen）を思わせるかもしれないね。プラトンの時代、いや、もっと以前から、インドのカースト制度はまさにこの三分法を知っていた。支配するカースト（聖職者のカースト、die leitende Kaste oder Priesterkaste）、戦士のカースト（die Kriegerkaste）、労働や商業にたずさわるカースト（die handeltreibende Kaste）だ。（一二四頁）

しかし、インドのカースト制度のこの三階層がいかなる意味において人間の魂の三区別と結びつき、しかも、これらがいかなるイデ

ア論のもとに追求されていたというのであろうか。インドのカースト制度は現在まで存続する差別主義の温床であるが、十四歳の女の子に、こんなものがプラトンの理想国家と少しでも関連があるように連想させることくらい悍ましいことは他にあまり考えることができないのである。トピカルな比較や比喩の曖昧さに余り目くじらを立てる必要はないのかもしれないが、女性観でも分かるようなプラトンの平等主義と、個物のほかはなにもないかのごときインドの差別主義という、全く相反するものが一緒くたにされたのでは黙っておくわけにもいくまい。かかる混同がみられるのも、「ソフィア（sophia、知恵）」を重んじる著者には、それと「フィロソフィア（philosophia、哲学、愛知）」との厳密な区別がついていないからではないかと思われるのである。

二

さて、『ソフィーの世界』を絶賛した本書の監修者である須田朗氏は、先に紹介した『哲学の探究』の中で、恐らくは御自身の執筆箇所と思われる一節において、「ソフィア」と「フィロソフィア」との相違について次のように述べておられる。

当時ギリシアには〈ソフィスト〉と呼ばれる一群の思想家が横行していた。ソフィストとは〈ソフィア（知識）〉を所有する者、つまり〈知識人〉といったような意味であるが、ペルシア戦争の影響で海外からギリシア本土に流れこんできたこの知識人たちは、生活のために弁論術を教えていた。ソクラテスの故国アテナイは民主政治の最盛期で、当然裁判が多くなったり、選挙に当選したりするために弁論術の需要が高まっていたのである。しかし、ソフィストも商売仲間が増えてくると、ただの弁論術を教えるのでは食えなくなり、次第に、白を黒と言いくるめ、黒を白と言いくるめる高度な詭弁術（きべんじゅつ）を教えるようにまでなった。そのため彼らは、〈詭弁〉を意味する英語の sophistication という言葉にその名を残しているくらいである。おそらくソクラテスは、そうした詭弁を弄してまで市民が自分の権利を主張し、民主主義が過度に発達するのは、国家（ポリス）の存立を危うくすると思ったのであろう。このソフィストたちへの挑戦を自分の生涯の使命と考えるようになる。しかし、この挑戦は絶対に不敗のものでなければならない。そのための拠点として持ち出されたのが〈フィロソフィア〉だったのである。（『哲学の探究』、一二五頁）

この『哲学の探究』を須田氏と一緒に監修した木田元氏は、単独の著書である『反哲学史』（講談社、一九九五年）において、西洋文化圏で成立した特殊な知の様式である「哲学」は乗り越えられるべきであるとの考えから、「哲学批判」や「哲学の解体」を目指す「反哲学」を標榜し、この「反哲学」の立場に立って、「哲学」という言葉の由来について、更に詳しく次のように記している。かなり長い引用になると思うが、学問めかしたその説明の中に「哲学」に対する反感を漂わせており、それが今日の哲学書ブームを支えている考え方に連なっていると推察されるので、敢えてかく引用する愚行を許されたい。

「哲学」という言葉の大本はギリシア語の philosophia なのであり、これがどのようにして成立した言葉なのかを考えてみれば、「哲学」が何であったかも幾分分かるにちがいありません。ところで、このギリシア語の philosophia が――形の上からいうと

——philein（愛する）という動詞とsophia（知恵ないし知識）という名詞を組み合わせてつくられた合成語であり、したがって、これはもともとは「知を愛すること」つまりは「愛知」という意味だということ、そしてこの言葉を最初に使ったのがソクラテス（Sokrates, B. C. 469-399）だということも、すでにご存知の方が多いと思います。

しかし、このphilosophiaという言葉は、これを「知を愛すること」と訳してみても「愛知」と訳してみても、どうも不自然な感じをまぬがれません。つまり、われわれが日常生活のなかで普通にものを考え、話し合っているかぎり、こんな妙な言葉を使うようなことはほとんどなさそうに思えるのです。それは、ギリシア語以外のいかなる言語にもこれにあたる言葉がないということによっても裏づけられます。もし自然な言葉なら、ほかの言語にも同じような言葉が生まれてくるはずです。古代のギリシア人といっても、われわれとそう違った生き方をしていたわけではなさそうですが、なぜ彼らのもとでだけこうした言葉が生まれたのでしょうか。

いろいろ調べてみますと、どうも古代ギリシア人のもとでも、これはそう自然に生まれてきた言葉ではなく、かなり不自然な意図のもとにつくられた言葉らしいことが分かります。それも、「愛知」という抽象名詞がいきなりつくられたわけではなく、それにはそれなりのいわば前史があり、それを考え合わせてみると、こうした妙な言葉がつくられたわけも、幾分納得がいくように思われます。この言葉は最初philosophos（「知を愛するところの」、「ものを知りたがる」、「知識欲の旺盛な」）という形容詞のかたちであらわれてきました。これにしたっておかしな形容詞ですが、これはギリシア語に古くからあったphilarguros, philotimosという形容詞に語呂を合わせてつくられたようです。このphilarguros, philotimosのphil——, philo——の部分はいずれもphilein（愛する）に由来するものですが、philargurosのarguros（アルギュロス）は「銀」、つまり当時の通貨のことであり、したがってphilargurosは「お金に貪欲な」という意味になりましょうし、philotimosのtimos（ティモス）はtimē（ティミー）（名誉）から来ており、したがってphilotimosは「名誉心の強い」という意味になります。こうした言葉に語呂を合わせてphilosophosという形容詞もつくられたわけです。（中略）

ピュタゴラス（Pythagoras, 紀元前六世紀頃）が、世の中には（金銭を愛する者ho philarguros や名誉を愛する者ho philotimos や知識を愛する者ho philosophos というような）こうした三種類の人間がおり、自分はそのうちの「知識を愛する者」なのだと言った、と伝えられています。

次いで、紀元前五世紀の歴史家ヘロドトス（Herodotos, B. C. 484-430）がこの言葉をphilosophein（「知を愛する」）という動詞の形で使っています。（中略）このphilosopheinという動詞をphilosophia（「知を愛すること」ないし「愛知」）という抽象名詞のかたちに変えて使ったのが、ソクラテスなのです。（中略）

そして、事実ソクラテスまでくると、同じ「知を愛する」といっても、その意味がそれまでとはがらりと変わり、ずいぶんひねったものになってきます。つまり、ピュタゴラスやヘロドトスのもとでは、「知を愛する」といっても、それはただ漠然と「知的好

奇心が強い」とか「知識欲が旺盛な」という程度の意味だったのですが、ソクラテスはこの言葉をはっきり限定した特殊な意味で使おうとするのです。（中略）

たしかに、愛知（フィロソフィア）についてのソクラテスの考えには不自然なところが感じられます。しかし、そうした不自然な考え方をソクラテスがあえてもち出してきたのには、それなりの理由がありました。つまり、彼はみずからを愛知者（ホ・フィロソフォス）と規定することによって、ソフィストとの論争において絶対に敗れることのない立場を確保しようと思ったのです。では、なぜ愛知者の立場は絶対不敗なのでしょうか。

それは言うまでもありません。みずから知識人と名乗るソフィストと、無知を標榜する愛知者（ホ・フィロソフォス）とが論争をするとすれば、愛知者（ホ・フィロソフォス）には何一つ答える義務はなく、答えなければならないのは、もっぱらソフィストだということになります。愛知者（ホ・フィロソフォス）はただ質問をし、それに対するソフィストの返答を吟味しさえすればよいわけです。しかも、当時のギリシアには問答に一種のルールがあり、答える方は、質問者が提出した質問に対してなるべく簡単にイエスかノーかで答えなければならないことになっていました。こうなれば勝負は明白です。ソクラテスは衆人監視のなかでソフィストに向かって、たとえば美について、あるいは勇気について、正義について、あれこれと質問をし、いろいろ答えさせた上で、その答えを吟味してそこにひそむ矛盾を指摘し、ついには彼らに、その事がらについての無知を告白させればよいのです。としてみると、「愛知（フィロソフィア）」なるものは、いわばソフィストを論破するための否定的な武器としてもち出されてきたものだということになります。そして、事実、当時のアテナイ市民たちは、「愛知（フィロソフィア）」の立場に立ってのソクラテスのこうした独特の論争の仕方を「エイローネイアー」（eirōneiā）と呼んでいました。（『反哲学史』、一四―二七頁）

右の木田氏も、先の須田氏も、申し合わせたように、愛知者（ho philosophos）の知者（ho sophos）に対する「絶対（に）不敗」の特質を強調する余り、当の愛知者は論争に勝つことに汲汲として対論者の非を論うのみでなんら自己の主張を鮮明にしない人であるとの印象を与えるが、プラトンの『国家』の描くところのソクラテスによれば、「哲学者（philosophos）とは、つねに恒常不変のあり方を保つものに触れることのできる人々のこと」（藤沢令夫訳、岩波文庫、（下）、一六頁：484b）なのである。しかも、自分が「無知」であることを知っているということは、他のだれに対するよりも自分に対して論理的に厳しく批判的であるということでなければならない。従って、「哲学者（philosophos）」は、その批判の矛先を自分や他人の人間そのものに向けているわけではなく、その考え方に向けてその論理的矛盾を突くのである。ところが、考え方と人間は同じであると思い込んでいるような世に人格者といわれる「知者（sophos）」は、論理的矛盾を突かれただけで不機嫌になってしまう。ソクラテスが敵を作った所以であるが、それを『ソクラテスの弁明』では、彼の口を通して次のように言わしめている。

それから私は、彼は自ら賢者（sophos）だと信じているけれどもその実そうではないということを、彼に説明しようと努めた。その結果私は彼ならびに同席者の多数から憎悪を受けることとなったのである。しかし私自身はそこを立去りながら独りこう考え

た。とにかく俺の方があの男よりは賢明（sophōteros, sophos の比較級）である、なぜといえば、私達は二人とも、善についても美についても何も知っていまいと思われるが、しかし、彼は何も知らないのに、何かを知っていると信じており、これに反して私は、何も知りもしないが、知っているとも思っていないからである。されば私は、少くとも自ら知らぬことを知っているとは思っていないかぎりにおいて、あの男より智慧の上で少しばかり優っている（sophōteros）らしく思われる。それから私は、前者以上に賢明の称あるもう一人の人をたずねたが、まったく同様の結論を得た。かくて私はこの人からも他の多くの人達からも憎悪せらるるに至ったのである。（久保勉訳、岩波文庫、二一頁：21c-d）

三

しかし、ソクラテスのように敵を作ることもなく、世の名声を獲得せんがために、自己の主張をもたずにノラリクラリとどうでもよい議論を繰返して人々を説得する弁論術（rhētorikē、修辞法）によって勝利を治め「知恵者」や「知識人」として称賛される人こそ「ソフォス」であり「ソフィスト」なのである。本書『ソフィーの世界』は、人類の三千年に及ぶ知恵を広く楽しく安易に身につけるためには格好の手引きとなるかもしれないが、本書から「自ら知らぬことを知っているとは思っていない」ソクラテス的な辛辣で厳格な批判を学ぶことはできはすまい。恐らく、著者ゴルデルが、それを知ってか知らずかはともかくとしても、本書を『フィロソフィーの世界』とはせずに『ソフィーの世界』とした理由はそんなところにあると見てよいであろう。確かに、『フィロソフィーの世界』では硬い感じがして売れなかったかもしれないのであるが、そもそも軟かいこと自体が私にいわせれば「反哲学」的なのである。

とはいえ、本書が、哲学について気軽にある程度の正確さをもって広く知りうるためには、かなりよく出来たものであることは認めざるを得ないだろう。現に、ソクラテスのことも（八〇―一〇〇頁）なかなか上手には書いてある。しかし、訳文で六〇〇頁を超える大部な本書を読むくらいだったら、前述のプラトンの『ソクラテスの弁明』や『国家』は勿論であるが、『プロタゴラス』や『饗宴』をじっくり読んだ方がましであろう。それに、『国家』以外はむしろ短篇と言ってもよいくらいだし、内容も充分考えさせられるものではあっても、所謂文章が難解で晦渋だということはないはずだからである。

にもかかわらず、この種の明晰な古典を読もうともしなかった人が、突如『ソフィーの世界』に飛び着くような現象が、なにゆえに起るのであろうか。十四歳の子供たちの間でよく読まれているというのなら格別気にすることもないのだが、本書が大学の一般教養の教科書に値するとかいう先の須田氏の発言やら、マスコミ等における世の知識人たちの称賛ぶりやらを見ているとなにやら奇妙な気持になってくるのである。現に、私なぞは、通勤電車のなかで、この部厚い本書を読んでいる人に二度までも隣合わせたことがある。一人はモーレツ社員風の壮年の男性で、アタッシュケースからそれらしき本を取り出すやケースを網棚に上げ立ったままその本を読み出したので、たまたま横に立っていた私は特に覗き込んだわけではないけれども、読み覚えのある数行がすぐ目に飛び込んできたのである。もう一人は恐らくは二十代の若い女性であった。学生ではなく

やはり会社員のように感じられたが、たまたま隣りにいた女性の本が見覚えのある体裁と厚さのものだったので、見るともなしに目がゆくと、ソフィーの会話がはっきりと読み取れたので、あの本に間違いないと思い知ったような次第である。もっとも、この二例は隣りで確認できた確定的な話であるが、遠くからそれらしき本を見咎めえただけなら数例に尽きないから、さすがベストセラーらしく、通勤電車の中でもかなり読まれているのかもしれない。まあ、漫画やコミックを読む大人が多いよりはましなのかもしれないが、十四歳の子の読むべき本がこんなふうに出回っているのを知るとやはり奇妙な気持になってくるのをいかんともなし難いのである。そんな折に、筑紫哲也氏のニュース23で、本書の著者ゴルデルに対する筑紫氏のインタビューが放映されたのを見たような気がするのだが、今はその内容も正確な時期も定かではない。しかし、その筑紫氏が『週刊金曜日』第一一〇号（一九九六年二月十六日）の中で次のように述べている記事だけは手元に控えられている。

最近、哲学を優しく説明した『ソフィーの世界』という本が、世界的ベストセラーになりました。特に日本でよく売れているときます。それは、自分がどう生きるべきかを考える人、考えざるをえない人がたくさん増えてきたことの表れの一つかと思われます。オウムの事件が起きた背景にも同じような状況があるだろうと思います。

しかし、私に言わせれば、「考える人、考えざるをえない人」が増えてきたというよりは、安易な説明、安易な修行を求める人が増えてきたというだけのことではないかと思われるのである。だからこそ、『フィロソフィーの世界』ではなく『ソフィーの世界』が売れているのであってみれば、少し意地悪く本書を検討してやれという気持も手伝って、本書が底本としたというドイツ語版も購入してみた。ついでに、二種あるという英語版も注文してみたら、一種だけは入手することができた。しかるに、「訳者あとがき」には、これらの版本のことがなにも明記されていないので、興味をもたれた方が入手し易いように、左に私の所持している版本を具体的に掲げておく。

(a)ドイツ語版　Jostein Gaarder, *Sofies Welt: Roman über die Geschichte der Philosophie*, aus dem Norwegischen von Gabriele Haefs, Carl Hanser Verlag, München / Wien, 1993

(b)英語版　Jostein Gaarder, *Sophie's World: A Novel about the History of Philosophy*, translated by Paulette Moller, Phoenix, London, 1996

右のドイツ語版を手にするや、私がすぐ目をやったのが、本書では扉（七頁）と本文中（二一一頁）とに二度にわたって引かれるゲーテの一節の原ドイツ語である。そのゲーテの一節は、本書でも重要な意味を付与されているのだが、その訳文が今一つ私にはしっくりしなかったことによる。ここにその池田香代子氏の訳文を示しておけば次のとおりである。

三千年を解くすべをもたない者は
闇のなか、未熟なままに
その日その日を生きる
――――ゲーテ――――

これのドイツ語原文が本書評の枕に掲げたものなのであるが、それをもう一度ここに並記してみよう。

Wer nicht von dreitausend Jahren

Sich weiß Rechenschaft zu geben,
Bleib im Dunkeln unerfahren,
Mag von Tag zu Tage leben.

これと比較して池田氏の訳がどうおかしいかを明確に指摘できるほど私はドイツ語を語る資格はないのであるが、原文をも手掛りにして、まずはゲーテ自体の既刊の邦訳を確めてみれば、全体の中でのこの一節の意味を確認することくらいはできるのではないかと思ったのである。しかも、原文によれば、これは脚韻を踏んだ詩であることから、『ファウスト』にでもある一節ではないかと山を張ったのであるが、その予測は見事不発に終った。そんなわけで、いずれ図書館でゲーテ詩集でも捲ってみようかくらいに思っているうちに、いつのまにか五月の連休も過ぎてしまい、ついには無精を決め込んでだれかゲーテに詳しい人に聞くことにしようと考えも変わってしまったのである。とはいえ、私もゲーテに詳しい人をそう知っているわけではない。そんな時、ふと我が大学の『広報』（本年四月二〇日付発行）の住所変更欄に、外国語部のドイツ文学専攻の柴野博子先生のお名前を見出したのである。柴野先生には、随分昔に、私の畏敬する先輩の渡辺重朗氏と大学で同期だったとの自己紹介を頂いたことがあり、その時からドイツ文学を専攻されている方だとは存じ上げていたのであった。しかし、それだけの面識しかないのでかなり虫のいい話だとは思ったが、意を決して先生にお手紙でお願いしてみた。すると、引越直後でまだ身辺落ち着かないだろうと思われたにもかかわらず、間もなくしてお電話で御連絡を頂いた後に、出典箇所のみならず、先生が所持されているゲーテ全集ドイツ語原典からの関連箇所とそれに対応する岩波文庫の小牧健夫氏訳とのコピーを送付して下されたのである。御教示を一人占めしないためにも、その資料の詳細を左に掲げておきたい。

(α) *West-Östlicher Divan*, Goethes Werke, Band II, Gedichte und Epen II, zwölfte Auflage, Verlag C. H. Beck, München, 1981, pp. 47-49, "Wanderers Gemütsruhe"

(β) ゲーテ作・小牧健夫訳『西東詩集』（岩波文庫）、九二―九四頁、「旅人の心の落ちつき」

(β)の小牧氏の訳は本書評の冒頭に掲げさせて頂いたのでそれを参照願いたいが、池田氏のそれと比べれば文意が非常に明解であろう。"von dreitausend Jahren sich Rechenschaft geben"は辞書的に直訳すれば「自らに三千年（の歴史）の弁明をする」ということになろうが、それが小牧氏の訳では「過去三千年の歴史について正しい批判をなす」となっていて更に文意が明白に理解できるのである。Rechenschaftを「正しい批判」とまで訳しうるかどうかは私の判断の及ぶところではないのであるが、ゲーテの同じ詩のこれより前の詩節には"Nun geht erst das Urteil an."とあり、これが小牧氏によっては「今ぞ批判は始まる」と訳されているから、同氏が、UrteilとRechenschaftとを共に「批判」の意を込めて訳されるなんらかの根拠はあるように感じられる。これに反し、池田氏の「三千年を解く」では、なんだかクイズ番組の歴史問題の謎解きみたいで、いかにも軽薄な印象を与えるのである。因みに、英語版では、"He who cannot draw on three thousand years is living from hand to mouth."（三千年に迫ることのできないものはその日暮らしで生きている）となっていて、私には池田氏の訳よりも尚更に意味がよくわからない。その上、"Bleib im Dunkeln unerfahren"が全く訳出

されていないのだから、本書の英語版がいかに英語圏に流布したとしても、ゲーテは泣きたくなるだけに違いない。しかし、我が国のみならず、英語圏においても、この手の本が流行するのは、本書のような気楽な啓蒙書を読めば、容易に三千年の歴史に肉迫して「ソフォス（知者）」の世界に遊ぶことができると錯覚する人が多くなってきた証拠なのかもしれない。

ところで、これを書いている最中の六月十五日付『毎日新聞』は、まるで私にその売れゆきを伝えてくれでもするかのように、本書の版元であるＮＨＫ出版の広告を掲載した。六月十五日がソフィーの誕生日であることを当て込んだ広告で、それによれば、これまでに本書の売れゆきは一六六万部を突破したそうである。またそこには、本書の監修者である須田朗氏の著書『もう少し知りたい人のためのソフィーの世界――哲学ガイド』が紹介されており、それによって「ソフィーの世界」に隠された「からくり」を「謎解き」しながら、新しい楽しみを見つけてみませんか。」とある。恐らく、反哲学的ソフィーガイドが立派に果されているに違いない。しかも、これを読めば、新カリキュラムによるおもしろくてためになる教養教育科目の精神が具体的にどういうものであるのかが理解できるのではないかと思う。

なお、私が柴野博子先生より資料を拝受した時に添えられていたお手紙には、結局は私の先輩でもある渡辺重朗氏の助力も得ることになったと正直に認められていた。従って私は同時に二人の先輩に御迷惑をおかけしたことになるのであるが、お二人には直接お会してお話を伺えば、より正確で蘊蓄に富んだ知識を御教示頂けること必定なのであるが、それをしないばっかりに、私の独り合点のみを書き連ねて、万一過誤があった時にのみ、それがお二人のせいにでもされたら誠に心外である。せっかくの御教示から筆の走りし分は全て私一人の責任であることを蛇足ながらお断りしておきたい。

四

さて、本稿は書評であるにもかかわらず、批判を先行させているような印象を与えているかもしれないので、以下は、できるだけ通常の書評に戻るように心掛けて終息に向うことにしよう。

本書は、冒頭に示した本書の副題「哲学史物語」からも分かるように、大雑把にいえば三千年にも及ぶ人類の哲学史を退屈することなく面白く知ってもらおうとの意図をもって著わされたファンタジーめかした啓蒙書である。先に問題としたゲーテの扉の詩は、その人類の哲学史の中途に当る「中世」の説明に入る直前に再び現われる。これを渡りに、初期のギリシア哲学から、キリスト教がギリシア=ローマ世界に登場して「二つの文化圏」（一九四―二一二頁）がドラマティックな出会いをする紀元後四世紀までの「古代」を千年、その後の五世紀から十四世紀までの「中世」（二一三―二四一頁）を千年、それ以降より「近代」「現代」を含めた未来までを千年と著者ゴルデルは考えているようである。

この大きな枠の中で更に個々に取上げられる哲学者を挙げれば、「古代」では、ソクラテス（八〇―九九頁）、プラトン（一〇七―一二六頁）、アリストテレス（一三九―一六〇頁）、「近代」「現代」では、デカルト（二九七―三一二頁）、スピノザ（三一三―三二四頁）、ロック（三二五―三三七頁）、ヒューム（三三九―三五五頁）、バークリー（三五六―三六二頁）、カント（四〇九―四三五頁）、ヘー

ゲル(四六〇―四七四頁)、キルケゴール(四七五―四九一頁)、マルクス(四九二―五一四頁)、ダーウィン(五一五―五四三頁)、フロイト(五四四―五六五頁)となる。

こんなふうに人名を列挙するとまるで無味乾燥になってしまうが、それをそうさせないところが著者ゴルデルの力量なのである。そこで彼は、哲学上の厳密さを多く犠牲にしてまで、力量発揮の面白さの方へウェイトを置く。その結果生まれたのがこの物語形式で、ソフィー・アムンセンにアルベルト・クノックスが哲学を講義して聞かせるという手法を取る。この手法を取っているのは勿論本書の著者ゴルデルであるが、この物語の中では、その功は、目下軍務に服しノルウェイの国連軍としてレバノンに駐留しているアルベルト・クナーグ少佐に帰せられる。この少佐がその年の六月十五日で満十五歳の誕生日を迎える娘ヒルデ・ムーレル・クナーグのために、彼女の誕生祝としてそれに間に合わせるべく書き綴っているのがこの物語のわけなのである。しかも、物語の中で実在することになっているこの父娘と、創作されたアルベルトとソフィーの男女とが不思議に交叉し、その交叉した絡繰が次第に明らかとなるのが本書の一種の謎解き部分を形成している。そして、著者ゴルデルは、この二組の男女の交叉する物語を、存在するのは我々の知覚だけだと主張したバークリ(Berkely)を扱った章まで(九―三六二頁)と、その直後の、周りの白樺(ビャルク)の木(Birke)に因んで「ビャルクリ(Bjerkely)」(バークリとの綴りの酷似に注意)と名づけられた庭を章名にしてヒルデの先祖に触れる箇所以降(三六三―六五五頁)とで、書き方をガラリと変えているのである。前半では、ソフィーとアルベルトの話があたかも実在するかのように明朝体(ドイツ語版と英語版ではローマン体)で書かれ、そこに挿入される話が正楷書体(ドイツ語版と英語版ではボールド体)で書かれているのに対し、後半では物語上の実在者であるヒルデと父親の少佐の話が明朝体(他は同上)で書かれ、そこに挿入される話が正楷書体(他は同上)で書かれている。かくして、ヒルデと父親が再会して話が落着く最末尾は次のとおりである。

「星がさっきよりも増えたわ」ヒルデが言った。

「ああ、夏の夜がいちばん深くなる時刻だね」

「でも、冬には星はもっとちかちかとまたたくわ。パパがレバノンに行く前の夜のこと、憶えてる?あれはお正月だったわね」

「あの時、きみに哲学の本を書こうと決めたんだ。クリスティアンサンの大きな本屋に行っても、図書館に行っても、若い人にぴったりの本がなかったんでね」

「わたしたち、白兎の細い毛の先っぽにいるみたいな気分ね」

「おや、何万光年の星の夜に出ていく人がいるぞ」

「ボートがひとりでに離れていくんだわ!」ヒルデが叫んだ。

「本当かい?」

「どうなっているの? さっきちゃんと、つないであるのを確かめたのに」

「たしかに?」

「ソフィーがアルベルトのボートを借りた時みたいね。ボートが池に流されてしまったじゃない?」

「じゃあ、こんども彼女のしわざだ」

「パパったら、冗談やめてよ。わたしはさっきからずっと、何かがいる気配がしてるんだから」

「だれか、海に飛びこんでボートを取りにいかないと」
「いっしょに行こう、パパ」
これで本書は終るわけだが、パソコンやワープロが発達した今日では、二組の男女の微妙な交叉や書体の書き分けなどは造作もないことであろう。著者ゴルデルがパソコンを使って本書を書いたことはほぼ確かであろうが、その意味でも本書は極めて今日的な書物と言うべきかもしれない。事実、彼がパソコンに通暁していることは、デカルトに絡めてパソコンに言及している箇所（三〇八―三一二頁）を読めば分かる。左に、アルベルト・クノックスがアルベルト・クナーグの情報をパソコンから消去しようとする一節を引けば次のとおりである。
アルベルトが何か書くより早く、スクリーンにはまた「c：」が現れた。
アルベルトが「dir. knag*. *」と打つと、データが現れた。
knag. lib 147, 643　15／06-90　12: 47
knag. lil 326, 439　23／06-90　22: 34
アルベルトは「erase knag*. *」と打ってデータを消去してから、コンピュータを終了させた。
しかし、こういうのは御愛嬌というものだが、デカルトについて次のように書くのは戴けない。人工頭脳に因むソフィーの質問にアルベルト・クノックスが答えた一節である。
ぼくたちは、本当に思考しているんじゃないかと思うような機械をつくった。もしもデカルトが見たら、きっとパニックを起こしただろうな。人間の理性は彼が考えたほどに自由で独立しているんだろうか、と考えこんだにちがいない。
だが、デカルトがもし現代に生きているとしたら、今日我々が所有している程度の人工頭脳を指して、我々人類が既に「自分の言うところの事はこれを考えていると、その証拠を示しながら（perler… en témoignant qu'ils pensent ce qu'ils disent）語ること」（Descartes, *op. cit.*, p. 92：前掲落合訳、七一頁）のできる機械を作ってしまったように書き、これを見てデカルトがパニックになるように書いている人のいるのを知ってさぞや驚くことであろう。デカルトの『方法序説』第五部をちゃんと読めば、決してこのように書くことはできないはずだからである。
本書の著者ゴルデルが、現代の思想界の動向には極めて敏感で、しかも、いかにもそれに進歩的に対応しようとしながらも、自分自身は全く無批判で通俗的であるということは、先に見たように、フェミニスト運動にはいかにも理解を示したかのように振舞いながらインドの差別主義には全く鈍感であることを知ればある程度推測はつくのであるが、現代文明に対しても、パソコンという超現代的な技術の便利さを享受しながら（あるいは、享受しているからこそ、と言うべきかもしれないが）、通俗的な今流行のエコロジストの姿勢を一歩も出るものではないのである。次に、この問題を巡るアルベルトとソフィーの会話の一節を引用しておくことにしよう。
「ぼくたちの時代はいろんな新しい問題に直面している。まずは深刻な環境問題だ。だから、二十世紀の重要な哲学の流れの一つはエコロジー＊（Ökophilosophie, ecophilosophy or ecosophy、英語版の呼称の一つでは philo も除かれていることに注意、あたかもフィロソフィーならずしてソフィーなるがごとし）だ。エコロジストたちは、ぼくたちの文明はまちがった道を

歩んできた、地球という惑星の存続に矛盾するようなコースをたどってきた、と主張している。エコロジストは環境汚染や環境破壊の具体的な結果をきわめるだけでなく、問題をもっと深く掘り下げて、ヨーロッパの思想（westlichen Denken, western thought）はどこかおかしい、と言っている」

「エコロジストの言うとおりだと思うわ」

「エコロジーは、たとえば進歩の思想(Entwicklungsgedanke, idea of evolution)を問題にする。進歩の思想は、人間は自然界のトップにいるということを、つまりぼくたちは自然界の主人公(Herren über die Natur, masters of nature)なのだということを踏まえている。そしてまさにこの考え方が命の惑星全体を生命の危険にさらすかもしれないのだ」

「考えただけでも腹が立ってくるわ」

「進歩の思想を批判するのに、多くのエコロジストは思想やアイディアを、たとえばインドなどのほかの文化から借りてくる。ぼくたちがとっくに失ってしまったものが見つかりはしないかと、自然民族と呼ばれる人びとの思想や生活を研究する」(五八九—五六〇頁：ドイツ語版、pp. 546-547：英語版、pp. 384-385)

これは、人間が「自然界の主人公」であるとするデカルトに対する反感を隠そうとはしないエコロジストたちの極普通の態度表明なのだが、デカルトを否定するなんの論理的根拠も示されぬままに、「考えただけでも腹が立ってくるわ」というソフィーの感情的反感によるエコロジー讃美が本書の流行と共に蔓延しても甚だ困るわけである。また、エコロジストが環境問題のヒントをインドなどの他の文化から得ようとしても無駄であることは既に述べたこともあるので、その件については、拙稿「自然批判としての仏教」（『駒沢大学仏教学部論集』第二一号、一九九〇年十月、三八〇—四〇三頁）を参照して頂くことにして、ここで特に触れることはしないが、自然を無条件に讃美せんとするエコロジーが「二十世紀の重要な哲学の流れの一つ」とする著者の頭に、ちゃんとした「哲学」があるとは私には到底思えない。しかも、なんの「哲学」もないからこそ、「パラダイム変換（Paradigmenwechsel, paradigm shift）」を求め、「ものごとをトータルに考えて、新しい生活のスタイルをつくっていこうとする運動」(五九〇頁：ドイツ語版、p. 547：英語版、p. 385)である、いわゆる「オルターナティヴ運動(Alternativbewegungen, alternative movements)」にも好意的になれるのである。しかるに、今示した邦訳の「トータルに考えて」の箇所に相応するドイツ語版には“ganzheitliches Denken（全体性的思考）”とあり英語版には“holism（全体論）”とあるように、この運動は、分析的で批判的な「哲学」に対する反発から起った、元来が「反哲学」的なものであることを忘れてはなるまい。それゆえに、「反哲学」の徒、須田朗氏も本書を絶賛しているのである。

なお、右の引用中にアスタリスク記号＊を付した箇所には、英語版にのみ“as one of its founders the Norwegian philosopher *Arne Naess* has called it（それの提案者の一人であるノルウェイの哲学者アルネ・ナエスがそう呼んだように）”の文があるが、これがノルウェイ語原文に由来するのかどうかは今の私には確認しようがない。ノルウェイ語版を見たという訳者の手になる本書にも、「あくまでも物語として読んでいただくために、註はつけたくなかったのです。」(六六二頁)という訳者の立場から、なんの註記も施されて

いないのである。

しかし、十四歳の子供なら物語として読むのも結構だろうが、大学生や立派な大人なら漫然と本書の世界に浸っているべきではないであろう。ましてや、仏教徒なら、本書ではほとんど無批判に取上げられている「神秘主義」（一七七―一八一頁）やブッダとヒュームの関係（三四五―三四六頁）をなんの吟味もなく容認すべきではあるまい。しかるに、どんな他愛ない本でも批判的に読むならば必ずや得るところがあるであろう。

（一九九六年六月十六日）

〔ヨースタイン・ゴルデル著・須田朗監修・池田香代子訳『ソフィーの世界―哲学者からの不思議な手紙』、本文、六六八頁（「解説」「訳者あとがき」「人名さくいん」計一〇頁を含む）、一九九五年六月三〇日第一刷発行、東京、日本放送出版協会、定価、二、五〇〇円〕